

その四

中小公共建設業は長い間、戦後の日本経済の根幹ともいえるべき部分を支えてきました。その役割とは、国の富を地方の津々浦々まで再配分するシステムの末端、いわば「毛細血管」としてシステムの重要な部分を担う事でした。

そのシステムの構成員としての中小公共建設業の一員である私たちが、「お客さんは誰か」などという問いを自分に発することなどは、まったく必要のないことでした。私たちは良くも悪くも、「政策」で生み出され、「政策」を頼り、「政策」のなかで生きてきたからです。

そして今、この業界はその役割を終えようとしています。いやもうすでに役割を終えてしまっていると言う見解もあるでしょう。

実際に私の住む地域では、平成二十一年度に経済対策の為の補正予算が、近年にないほど土木工事につき込まれています（全盛期に

は及びもつきませんが、我が社を含めた近隣のどの会社もそれを消化するのに青息吐息で、それによって、地域の新たな雇用の受け皿になろうなどと考える経営者はどこにも存在しません。すでにその体力はなく、また、来年度に明るい見通しが全く持てない以上、そうなることも当たり前のことでしょう。私たちが明らかに斜陽を迎えた産業となつてしまっているのです。しかし私は、この業界に存在意義がなくなつたなどとは、これっぽっちも思っていないせん。中小公共建設業という業種そのものが消滅することはないと信じていますし、相変わらず住民の暮らしにとって（立場を変えれば私たち自身がそうなのですが）、なくてはならない仕事だと思っています。